

令和 5 年 5 月 30 日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02685

研究課題名（和文）資質・能力形成と教科内容の関連についての実践的研究

研究課題名（英文）Practical research on the relationship between competencies and curriculum content

研究代表者

子安 潤（KOYASU, Jun）

中部大学・現代教育学部・教授

研究者番号：90158907

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：教育活動を資質・能力の形成の観点から把握しようとする構想が広がった。その結果、子どもを活動に駆り立てる教育に注目が集まった。そこで教育内容の観点がどのように位置づけられているを探ることとした。授業のデジタル化の中で、PCの操作に目がいくと、教える内容に関する研究が十分でない事態が一部に生まれていた。また、活動的ではあるがドリル学習となってしまうものもあった。それに対して、リアルな学びを中心においた授業の構築が課題であることが鮮明となった。また、学習ログの収集はメリットばかりではなく、デメリットのあることもわかってきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教育構想を描く場合、子どもに育てる知識・技能、資質・能力を全体的に把握することが重要である。また考察するにあたって、子どもの観点ばかりではなく、教える内容の観点、教える教師の観点をトータルに把握する必要がある。この点を忘れて一部の観点だけを重視すると教育活動のゆがみあるいは子どもの認識の形成にマイナスとなる事が見えてきた。授業のデジタル化も同様で、教育活動の画一化をもたらし、リアルな学習の阻害要因になる事もあることが見えてきた。教育のデジタル化を称賛する前に、慎重な研究が求められている。

研究成果の概要（英文）：There is a plan to grasp educational activities from the viewpoint of the formation of qualities and abilities. As a result, attention has focused on education that drives children to action. Therefore, I decided to explore how the viewpoint of educational content is positioned. In the digitization of classes, when I noticed the operation of the PC, there was a situation where there was not enough research on the content to be taught. Others were active but became drill-learning. On the other hand, it became clear that the construction of lessons centered on real learning was a challenge. In addition, it has become clear that the collection of learning logs has not only merits but also demerits.

研究分野：教育方法学

キーワード：資質能力 教科内容 授業の画一化 学習ログ

1. 研究開始当初の背景

20世紀末から、社会の先行きに対する不安や見通しの不確かさが欧米を中心に語られるようになり、その不確かさに対応した教育が語られるようになった。その一つの方向として資質・能力の形成に力点を置いた教育構想が議論されるようになる。それは、従来の既存の知識と技能を伝達し、その集積の量と正確さを指標とする教育を修正する傾向を持つ。定型の問いに定型の解の集積と表出に終始する教育から、解が一つとは限らない問いに対応する力量形成が目指されるようになる。単なる知識の伝達・教授ではなくて、その教育活動を通じたコンピテンシーの形成を意図的に試みる動向が世界を席卷するようになる。その代表例が、PISA調査のキー・コンピテンシーといった構想である。類似の21世紀型スキルなどいくつかの構想が打ち出されるようになった。この問題への取り組み方は、各国・各地域・研究者によって異なったアプローチだがそれぞれ始まる。

日本では、ジェネリックスキルを意図的に教える試みがまず始まる。その代表例が、コミュニケーション・スキル、あるいは問題解決スキルといったタイプの試みである。これらは一定の有効さを持っているように見えるが、他方で、すぐに形式主義化が始まった。すなわち、ジェネリック・スキルとして取り出されたステップに合わせたコミュニケーションや、問題解決のステップをいつも同じ歩みにそろえてしまう教育実践の試みである。そうした教育実践が地域や学校単位でならび始めた。

こうした光景は、従来の学校の統制システムと組み合わせられて拡大し始めた。こうなると一過性の流行で終わる危険性さえ感じられるようになった。

2. 研究の目的

ジェネリック・スキルが一定の有効性を持つとしても、それを自己目的化して教えようとする試みは、新たな授業の画一化をもたらすだけに終わる可能性があると考えられた。端的に言えば、外見はジェネリック・スキルの指標を踏襲しているが、問題事態の解決あるいはより深い理解と関わりがなくなることとも考えられた。

そうした事態に陥らないためには、何が必要なのか。学校を取り巻く社会制度的改革も必要であろうが、教育課程論や教育方法的な知見からすると、ジェネリック・スキルの一人歩きをやめ、教える内容や教材に即した位置づけにジェネリック・スキルを変更する必要があると考えられる。すなわち、教育の目標・内容・方法の統一という観点である。

しかしながら、それを理念として掲げるだけでなく、教師の個々の教育実践のレベルにおいて、検証していかなければならないだろう。また、そうした視野を教師が獲得する過程にも注目しておく必要があると考えた。というのは、一過性の流行に左右される事態は、近代学校の比較的早い時期から繰り返されてきたからである。これを超えるには、個々の教師が自分自身の授業論として教育の目的・内容・方法の統一という観点を身体化していなければ、一時的対応、一時的流行への保身に終わると考えられたからである。

こうして以下の課題を追求することとした。

- ・ジェネリック・スキル等を通じた資質・能力形成(コンピテンシー形成)の試みの動向を把握すること。この動向については、日本国内だけでなく、OECD諸国をいくらか含めたいと考えた。
- ・それらジェネリック・スキルの有効性と課題を検討すること。教科の違いや学習する年齢の違いの影響も考えられるが、ジェネリックの意味を意識的に把握できるようになると想定される小学校高学年以上をこの観点では主として対象とすることにした。
- ・ジェネリック・スキルの意図的教育実践の批判的分析。
- ・他方で、教育内容・教材の研究を重視する実践の探索とその分析。
- ・近年、教科書に織り込まれるようになった学習活動へ指示の功罪に関する検討。
- ・能力形成論の再検討。
- ・資質という用語の導入の経緯に関する考察。

3. 研究の方法

ジェネリック・スキルを意識した教育実践は、かなり古くから存在する。問題解決のステップの定式化を基底におく問題解決学習一つをとっても、20世紀初期には一定の定式化が試みられていた。コミュニケーション・スキルについても同様である。そこで、それらの試みに関する歴史的資料も一部に限られると思われたが収集の対象に含めることとした。

当然、現在、広く流通し始めている動向を中心に文献的には収集し、分析することとした。ジェネリック・スキルは多様に存在しているが、今回は、問題解決やコミュニケーション・スキルに関わりがあるタイプのモノを主として検討対象とすることとした。

また、そうした近年の資料に実践を提案している教員の中からこの問題への関心を共有できる人に教育実践の参観や意見交換の機会を依頼することとした。数は多くなくとも、自律的教育

実践、自律的な教材研究を試みる教員であることが今回の研究には必要な条件と考えた。

そうした条件にかなう教員の授業の作り方、授業の準備の仕方を考察しながら、研究テーマにアプローチすることを予定としては構想した。

初年度は、文献資料を集めつつ、資質・能力形成論の動向を探ることを中心課題とすることから始め、その動向の一つとして韓国教師のインタビュー調査を実施することとした。資質・能力形成の試みを日本よりわずかに早く教育政策として取り込み始めた国だったからである。

ところが、その調査を終えた翌年度から感染症が日本にも入り込み、海外渡航調査、各地の学校や教師へのインタビューや授業参観がひどく困難となった。

その間に、GIGA スクール構想が前倒し実施されることとなり、PC タブレットを利用した授業と授業づくり、教育活動の ICT 化、あるいはそれらを利用したジェネリック・スキルが急速に各地で試みられるようになった。こうした変化を視野に入れた研究に修正して初期の研究目的を追求することとした。

すなわち、PC タブレットを利用した教育の実践動向とその可能性と限界、ICT 化に伴う教育活動の画一化、AI ドリルの導入による教育活動・学習活動の課題、思考の可視化や問題解決と対応の定型化、それらと教材研究・授業構想の抱える課題を視野に能力形成の子試みにいかなる変化が生まれつつあるかを考察することとした。

新規試行的な授業実践の観察は困難となったが、PC タブレットの普及と ZOOM をはじめとしたコミュニケーション・ツールの普及は遠隔地の教師との意見交換は以前より容易となり、入手する情報は多角的となった。当然リアルな交流とは異なる限界が存在するが、困難な中でのわずかではあるが光明となった点も存在した。

4. 研究成果

研究初年度と二年度ならび感染所流入の初年度を中心とした研究の成果は、『画一化する授業からの自律』学文社に単著としてまとめ公刊した。内容は、授業の画一化として、目標と内容統制、教科書を中心とした教材の統制が強く作用すると資質・能力の形成も形骸化する場合がある事、さらにモデルとしての教育活動のスタンダードの提案が教師の支援として構想されたものであったとしても統制として作動することがあり、教師の自律的権限としての授業や教育活動の構想・実践の自由を保障することが必要であることを授業動向に即してその構造を提案した。

また、感染症の拡大に伴って広がったオンライン教育や授業の ICT 化の実態を各種調査データと実施報告をデータとしてまとめ、一般のジェネリック・スキルを含んだ授業とは比較にならないほど、オンライン授業やデジタル・コンテンツの利用が授業の画一化を促進することを解明した。さらび、PC タブレットを用いた「個別最適な学び」という提案がいくつかなされるようになったが、この場合の「個別最適」は類型的な確率にとどまり、リアルな教育実践における「個別最適な学び」に向けた対応とは質的に異なることを、デジタルのアプリケーション等の人工知能モデルの原理に即して解明した。

さらに、その後の研究としては、北海道教育学会、日本教育法学会、日本教育政策学会における課題研究等の報告者として発表を行った。それぞれの報告内容はそれぞれの学会誌に論文として掲載された(予定)。さらに、教育雑誌に関連する論考を発表した。それらの論文の一部は、『資質・能力形成と教科内容に関する研究資料集』として報告書を作成し、本研究にご協力いただいた関係者に配布した。

今後、学習ログの収集と漏洩、学習活動のデジタル化とリアルな学びの差異に関する研究を継続し、それぞれの課題についての研究を続ける予定としている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 子安潤	4. 巻 第212号
2. 論文標題 「個別最適な学び」の虚像と実像	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 高校生活指導	6. 最初と最後の頁 88-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 子安潤	4. 巻 第30号
2. 論文標題 授業の画一化と教師の自律性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教師教育学会年報	6. 最初と最後の頁 88-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 子安潤	4. 巻 932
2. 論文標題 GIGAスクールの不協和と協働学習の課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史地理教育	6. 最初と最後の頁 114-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 子安潤	4. 巻 第17号
2. 論文標題 教育の画一化と授業のICT化の課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育学の研究と実践	6. 最初と最後の頁 65-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 子安潤	4. 巻 第27巻
2. 論文標題 指定討論 学びと生活の豊かさの探究へ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国四国教育学会第73回大会 シンポジウム成果報告書・資料集	6. 最初と最後の頁 27-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 子安潤	4. 巻 896
2. 論文標題 未来の教室の設計を変える	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 36-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 子安潤	4. 巻 753
2. 論文標題 ICTの不可能性とリアル授業の可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 生活指導	6. 最初と最後の頁 58-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 子安潤	4. 巻 第113号
2. 論文標題 授業づくりをめぐる韓国の教師調査に基づく研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中部大学現代教育学研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 子安潤	4. 巻 第209号
2. 論文標題 高校新学習指導要領を公正に読む	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高校生活指導	6. 最初と最後の頁 46-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 子安潤	4. 巻 第1231号
2. 論文標題 画一的教育を真正性と子どもの視点から変える	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学校教育	6. 最初と最後の頁 22-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 子安潤	4. 巻 1208
2. 論文標題 教科に固有な見方・考え方の教育をつくる	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学校教育	6. 最初と最後の頁 22-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 子安潤	4. 巻 第70巻第7号
2. 論文標題 「資質・能力」ベースの授業を変える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 生活教育	6. 最初と最後の頁 52-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 子安 潤	4. 巻 871
2. 論文標題 パターン化する授業を変える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 28-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 子安 潤	4. 巻 2018年 8月号
2. 論文標題 資質・能力と教材研究ベースの配置転換	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 子安 潤	4. 巻 265号
2. 論文標題 新学習指導要領の21世紀枠を破る	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国語の授業	6. 最初と最後の頁 102-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 子安 潤	4. 巻 741
2. 論文標題 画一化の対話と討論をここから変える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 生活指導	6. 最初と最後の頁 48-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 子安潤
2. 発表標題 学びと生活の豊かさの探究へ
3. 学会等名 中国四国教育学会第73回大会 シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 子安潤
2. 発表標題 教育の画一化と授業のICT化の課題
3. 学会等名 北海道教育学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 子安潤	4. 発行年 2021年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 203
3. 書名 画一化する授業からの自律	

1. 著者名 子安潤 他14名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 134
3. 書名 感染症を学校でどう教えるか	

1. 著者名 子安潤 他18名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 学術図書出版社	5. 総ページ数 205
3. 書名 コロナ禍におけるポスト・コロナ時代の教育	

1. 著者名 子安潤、久田敏彦、湯浅恭正、山田綾、白石陽一、小柳和喜雄、福田敦志、高橋英児、趙卿我、竹川慎哉	4. 発行年 2019年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 182
3. 書名 教科と総合の教育方法・技術	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------